

アートであそぼう！—障害児を理解するために— 呉市子育て支援プログラムにおける実践からの考察

小笠原文*、狩谷美穂**

Let's Play with Arts! Understanding children with disabilities
Report done on the workshop for Kure-city family support program

Fumi OGASAWARA, Miho KARIYA

Seven years ago, the Support for Persons with Developmental Disabilities law was enacted throughout Japan in April of 2005. The law is intended to support people with autism, Asperger's disorder, learning disorders, and attention deficit hyperactive disorders. In the past, children with developmental disorders were labeled as “undisciplined children” or “difficult child,” and they did not receive professional support from the government. Recently, the recognition of developmental disorders has increased. However, nursery school teachers still face a strong need for practical methods to care for children with disabilities. In 2013, the authors of this research abstract facilitated a workshop entitled, “Let's Play with Arts! for understanding children with disabilities,” for the Kure-city family support program. This following research was written to introduce and examine the effect and results of the workshop, which utilized artistic activities as a tool to understand disabled children.

キーワード：アート arts、障害児理解 understanding children with disabilities

1 呉市子育て支援プログラムとは

呉市子育て支援プログラムは、「子育ての現場」で働く保育士・幼稚園教諭のリフレッシュ教育、実践技術向上を目的として、平成20年より呉市と広島文化学園大学の協賛で開催されている研修会である。呉市内の保育士・幼稚園教諭約20名が職場より派遣され、研修を受けるというもので、参加者も21歳の新人から50歳代の副園長まで幅広い。本研修は講義と演習の両形式で行われ、講師は広島文化学園大学教員と呉市市役所職員が務め

る。その内容は実践力強化を念頭に置き、「発達心理学」「小児救命救急演習」「子育て支援と行政」など多岐に渡り、研修会終了後には、広島文化学園大学学長から修了証書が授与される。

平成20年から平成24年までは2週間の研修であったが、職員の長期派遣の困難さなどが現場から意見として挙げられた結果、平成25年度はプログラムを凝縮した形で、1週間の日程で行われることになった。平成25年度は7月31日（水）から8月6日（火）に行われ、ワークショップ「アートであそぼう—障害児を理解するために—」は8月5日（金）の4コマ（1コマ90分）で実施された。

* 広島文化学園大学 学芸学部 子ども学科
** 広島文化学園大学 学芸学部 音楽学科

2 発達障害児

発達障害児と言ってもその種類と程度は多岐にわたる。昨今メディア等で取り上げられている発達障害の多くは軽度発達障害とされるもので、自閉性障害、アスペルガー障害、注意欠陥多動性障害、学習障害を指している。自閉性障害は自閉症とも呼ばれ、仲間関係を作ることの失敗や対人的、情緒的相互性の欠如、言葉の遅れ、こだわりの強さ等が特徴としてあげられる。また、3歳以前に対人的相互作用や象徴的遊びに異常や遅れがみられる。アスペルガー障害については自閉性障害と同様、情緒的相互性の欠如等が特徴としてあげられるが、臨床的な言語や認知の発達において遅れがみられない。注意欠陥多動性障害はADHDとも呼ばれ、集中力の欠如によって先生の指示に従わない、落ち着きのなさ、そして衝動性が特徴としてあげられる。どの障害も明確な区別がつきにくく、グレーゾーンと呼ばれる特定不能の状態も多く見られる。軽度発達障害の診断を受ける子どもの増加傾向についても軽視できない問題である。平成18年に実施された厚生労働省による調査では、学習障害(LD)、注意欠陥／多動性障害(ADHD)、高機能自閉症やアスペルガー症候群を包含する高機能広汎性発達障害(HFPDD)、軽度精神遅滞と診断される5歳児の出現率は約8～9パーセントとある。

発達障害と診断されなくても、上記に述べたような落ち着きのなさや、こだわりの強さ等の要素は多くの子どもに見られる。このような子どもについては、親の嫉の悪さが原因とされていた時代もあったが、実際には脳の障害であり家庭環境や嫉に影響されるものではない。近年、発達障害児への関心と研究は急速に進み、発達障害児を育てる保護者や保育者に向けた数多くの書物が出版されている。しかし、論者(狩谷)自らの体験からも言えるように、実際、発達障害児の診断を受けた子どもと接するまでは彼らの実態を理解できていないことが多い。これについては、保育の現場でも同じことが叫ばれている。これは、障害の特徴とされる要素の表れは子どもにより様々であることも原因である。例えば「こだわりの強さ」は多くの発達障害児に見られる特徴であるが、何に対してのこだわりかによっては表出される行動に

も大きな違いが出る。このように、発達障害児についての理論的理解はできていても、実際の関わり方となると多くの保育士がテキスト通りにはいかない悩みを抱えたままである。発達障害児をどう受け入れ、保育するのかについての相談は本ワークショップの中でも多く寄せられた。

3 インクルーシブ保育・教育

我が国では、平成17年4月に発達障害者支援法が制定された。既存の障害者福祉制度ではサポートしきれず、その気付きや対応に遅れがちであった「自閉症」「アスペルガー症候群」「LD(学習障害)」「ADHD(注意欠陥多動性障害)など、いわゆる発達障害者についての法的な支援を定めたものである。平成19年度から「特別支援教育」が始まったが、これについては、障害児と健常児の分離が進み、さらには障害児が保育所や幼稚園・小学校から排除される傾向にあると懸念する声もあがっていた。一方で、国際的な流れとして、平成18年12月に国連総会で「障害者の権利に関する条約」が採択された。その中では「障害のある者となない者が共に学ぶことを通して、共生社会の実現に貢献しよう」といういわゆる「インクルーシブ教育(包括的教育)」の考え方が示されている。日本でも同条約の批准に向けて、平成23年8月に障害者基本法が改正され、「可能な限り障害者である児童および生徒が障害者でない児童および生徒と共に教育を受けられるように配慮」とされた。これらを受けて、中央教育審議会では特別支援教育のあり方について、報告書をまとめた。そこでは「特別支援学校と幼・小・中・高校、あるいは特別支援学級と通常の学級間での交流及び共同学習をいっそう進める」とされている。平成19年の特別支援教育開始時には「完全な分離にならないように付加的に行われているだけ」という批判を受けた「交流および共同学習」であるが、それについては、「いっそう進める」という記述に留まり、その具体的な内容については触れられていない。つまり、「受け入れるが、その方策は未定」という状態である。このように教育・保育の現場において、「受け入れる」側と「受け入れられる」側双方にとって多くの課題を抱える障害児教育(保育)問題は、その解決方法が求められ

ている分野である。保育士や教員を対象とした研究会や研究報告書などでも頻繁に「気になる子の保育」「グレーゾーンの子どもとクラス運営」などが取り上げられることからその関心の高さが伺えるであろう。「インクルージョン」とは「排除しない」「受け入れる」という意味である。よって、「インクルーシブ保育・教育」は「共に育つ保育」「共に学ぶ教育」と表現することができ、それは「相互理解」の基盤の上に成り立つ。つまり、障害のある子どもが「適応」という一方向性のものではなく、障害のない子どもも幼少期から「障害」や人間存在の「多様性」を理解し、尊重する心を育て、将来の共生社会をつくるための基礎を培うという保育・教育である。

その具体的な実践方法が模索されているインクルーシブ教育について、「幼児造形教育」と「音楽療法」を「幼児教育」において相互交流を図り、結合させるひとつの試みとして本ワークショップを位置づける。

4 「アートであそぼうー障害児を理解するためにー」ワークショップの目的・流れ

本ワークショップには私立保育園保育士4名、公立保育園保育士9名、私立幼稚園教諭2名の計15名（男性1名、女性14名）が参加した。勤務年数は1年～32年と幅広いが、研修会6日目ということもあり、緊張感の中にも和やかな雰囲気が見られた。

ワークショップの構成は「触覚・聴覚・味覚の発見」「自由な音の発見」「触る絵本と音づくり」「振り返り」の4つのパートに分かれる。

パートⅠ 触覚の発見 聴覚の発見 味覚の発見	<ul style="list-style-type: none"> ・アイマスクをしての自己紹介。 ・アイマスクをして机の上に置かれたものを触る。 ・自分が触っているものを言葉で説明する。 ・アイマスクをして配られた飴玉を食べる。（色々な味の飴玉を用意する） ・アイマスクを外して、感想を発表する。 ・「触れる絵本」についての説明。実際に手に取って見る。
---------------------------------	--

パートⅡ 自由な音の発見	<ul style="list-style-type: none"> ・全員が輪になるように椅子を設置。 ・打楽器と、ドラムサークルの説明。 ・身体を使った音（ボディーパーカッション）と声の即興アンサンブル。 ・演奏を通して感じたことを述べる。 ・好きな打楽器を選択する。 ・一人ずつの楽器の音を聞きあう。 ・パルス（一定リズム音）を聞きながら、一人ずつ自由なリズムパターンや奏法で演奏に参加する。 ・全体即興合奏開始 ・ファシリテーターによる介入（ストップカット、コール&レスポンス、ソロ体験、テンポアップ、テンポダウン等）。 ・演奏を通して感じたこと等を述べる。
パートⅢ 触る絵本と音作り	<ul style="list-style-type: none"> ・グループに分かれ、円形のテーブルで作業をする。 ・グループで物語を作り、様々な素材を駆使して「触れる絵紙芝居」を作成する。 ・その際、「気になる子」を主人公とする。 ・音をつけながら発表する。
パートⅣ まとめ	<ul style="list-style-type: none"> ・全員で大きな円形に椅子を並べて座る。 ・1人ずつ感想などを述べる。

4-1 触覚の発見

本ワークショップの第一部「触覚・聴覚・味覚の発見」は2013年7月23日および24日に、広島文化学園大学に於いて国立民族学博物館准教授広瀬浩二郎氏を招聘し、行われたワークショップに準ずる形式で実施した。広瀬氏は視覚に頼らない知的探求の手法として「さわる文化」の可能性を追求し提唱する、日本宗教史と障害者文化論を専門とする研究者で、各地で「さわる」行為に着目した多くのワークショップや講演会を展開している。論者（小笠原）も2013年6月23日に開催された「他者理解を楽しむワークショップ「うごい手、つくっ手、つたえ手～触覚がひらく身体のみしぎ～」(Dance & People¹主催：広瀬浩二郎氏ナビゲーター：京都府大山崎ふるさとセンター)

に参加した。アイマスクで視覚を遮り、モノに触る、匂いを嗅ぐ、体を動かすといった活動は実際に行ってみると、想像以上に戸惑いを伴うものであった。視覚が他の感覚に対して圧倒的な優位を持つ現代社会に於いて、多くの人が、視覚以外の感覚を忘れ、日常的に使わないことによって、「使いものにならない」という状態になっていることは否定できない。特に「触覚」に関する感度の低下は著しい。

一方で、スイスの哲学者・教育学者のJ. J. ルソー(1712-1778)はその著書「エミール」の中で、幼児期に於ける感覚の訓練の重要性を述べ、イタリア初の女性医師で、教育学者のM. モンテッソーリ(1870-1952)は「触覚の敏感期」には、さまざまな感触を楽しむ時期で、子どもが様々なモノの抵抗度の違いを確かめているときに脳も刺激されると述べるなど、古くから「触覚の発見」は子どもにとって、その心身の発達を促す有効な手段として専門家が着目してきた事柄である。

本ワークショップでは、アイマスクを用いて視覚を遮った状態で、自己紹介を行う、色々なモノに触る、飴玉を食べるなどして感覚を働かせる活動を行った後、特に「触覚」に焦点を当て、「触覚」を用いた造形活動案として「触れる絵本」を紹介した。子どもの発達をサポートするもののひとつとして「絵本」が挙げられるが、「絵本」は「絵」が主体であり、「視覚」によって解説されるという性質を持ち、低年齢になるほどその傾向は強い。一方、点字が読める年齢未満の視覚障害児がアクセスできる絵本は希少である。「健常児が視覚で絵本を楽しむように、視覚障害児も触覚で楽しめる絵本が必要である」という保護者の願いは、70年代半ばから国内外各地での小さな活動の原動力となってきた。90年代に入り、インターネットの普及によって、各団体の情報交換や交流が急速に進むとともに、「触れる絵本」への世間での認識も高まってきている。

今回は、和訳本として「はらぺこあおむし」(エ

リック・カール作、偕成社)「これ、なあに？」(ヴァージニア・アレン・イエンセン作、偕成社)など、日本語の本として「チョコキョキョッキン」(樋口通子・岩田美津子作、てんやく絵本ふれあい文庫)「ゆかいなどうぶつ-さわってあそぶ絵あわせカード」(川添康宏作、福音館書店)など、フランス語の本として「Crokato, l'animal qui change de peau」(Claudette Kraemer作、Les Doigts Qui Rêvent出版)「Mes 5 sens」(Lynette Rudman作、Les Doigts Qui Rêvent出版)など、制作年、国、使用素材について、その多様性が伺える「触れる絵本」を用意し、実際に触るなどして鑑賞する活動を行った。

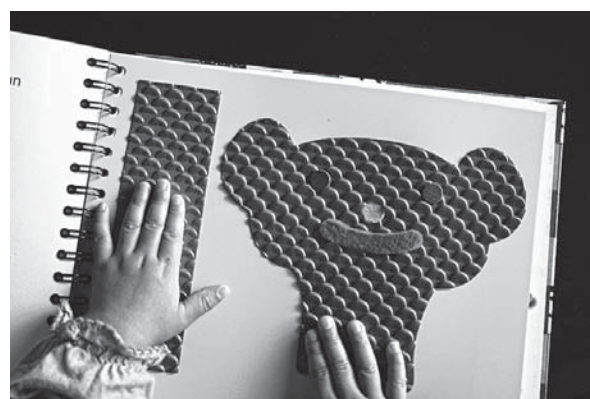


写真1 フランスの「触れる絵本」“Crokato, l'animal qui change de peau”

4-2 打楽器で即興演奏体験

打楽器を用いた即興演奏体験の目的は、①参加者の緊張を緩和し、心身共にリラックスする、②個人の自由な表現を取り入れた音楽活動の提案、③発達障害児にありがちな「ちょっと違う」表現を集団音楽に取り入れる体験、④個性の違いを認める活動の体験、⑤即興音楽の楽しさを体験する、である。保育現場で取り入れやすい打楽器というシンプルなツールを用いて即興演奏体験をすることで、普段、現場で使用されている音楽楽曲や活動との違いを体感してもらい、その可能性についてディスカッションし、現場へより適用しやすい方法を探ることも重要なねらいである。

活動は、まずウォーミングアップとして身体と声を用いた音楽体験を行った。最初に「パッ」という声と足を床に叩きつける音の組み合わせでのデモンストレーションを行うと、参加者から笑い

¹⁾ Dance & People

「多様な身体性の出会いとやりとりの場を作り、そこから新しいダンスやダンスを超えた可能性を開拓していくこと」を目的とした京都に所在する任意団体。地域をベースにしたワークショップ、公演を目的とした創作ワークショップ、公演、施設などでのワークショップ開催、ワークショップの派遣を行っている。

声があがった。続いて参加者の一人が自分なりのリズムパターンを作り出し、それに次々と参加者が加わった。参加者の反応を理解することと、参加者自らの感情表現のためにウォーミングアップ直後に言語によるフィードバックの時間をとった。そこでは「恥ずかしい」「自由にすることは難しい」「正解を求めてしまう」等の意見が出され、自由な即興性が高い音楽活動に対しての抵抗と緊張がうかがえた。

次にシェイカー、フレームドラム、フィンガースィンバル、ビブラスラップ、鈴、タンバリン、レイスティック等の打楽器の中から好みの楽器を選択した。参加者は円になり、それぞれ選択した楽器の音を一人ずつ鳴らしてもらった。音色の違いに気づくことで、参加者が自らの存在のユニークさを認識することが目的である。続いて論者(狩谷)の叩くフレームドラムでのパルス(シンプルで安定したリズム)を聞きながら自分が「好き」と感じられるリズムと音色で自由に加わった。全員の音に加わったことを確認し、論者(狩谷)がファシリテーター(物事を容易にするためのガイド役)としてリズムに変化を促したり、一人一人の音を聞くためのソロを促したり、また音量やテンポの変化を加えた。

この活動は、ドラムサークルと呼ばれる手法を参考にして行った。ドラムサークルとはその名の通り、ドラム(ここではドラムセットではなく太鼓類)をサークル(円)になって演奏する集団打楽器演奏活動である。ファシリテーターと呼ばれるガイド役が存在し、参加者の演奏体験をより容易に楽しめるように導く役割を担う。ファシリテーターは参加者同士のインタラクティブな音楽的対話に気づき、それをグループ全体に反映させ、参加者の意識を個人から集団へと導く。

打楽器を演奏し、集うという極めて原始的で民俗的な音楽行為は世界中どこにも見られる人間の作り出した音楽文化である。この普遍的とも言える活動を現代に甦らせたものがドラムサークルである。ドラムサークルにもさまざまな方法とスタイルが存在するが、即興的要素が重視され、人々のエンパワメントを目的に行うという点では共通している。



写真2 ドラムサークルで使用した民族打楽器。



写真3 ドラムサークルで使用した太鼓類。

4-3 「気になる子」が主人公の「触る絵(紙芝居)」づくり・発表

第一部の「触覚・嗅覚・味覚の発見」と第二部の「自由な音の発見」を具現化する実践として「触れる絵本と音づくり」を行った。グループは自然に3つに分かれ(4人、5人、6人グループ)、各グループで物語をつくり、「触れる絵」については、一人一ページを担当するという形で進められた。音については、物語構成と同時進行でつくる班や、紙芝居が完成してから全体を音読しながら決めて行く班など、その扱い方には違いが見られた。物語構成にあたっては、「気になる子」を主人公にするという条件が設けられた。「触れる絵」を作成する材料としてフェルト、不織布、ウール、木綿、ナイロンなど様々な触覚の布やビニール、段ボール、梱包材、モール、綿(アクリル)など多くの素材を用意し、それらを切り、工作用紙(ボール紙)に貼るという作業行程が取られた。

どの班もそれぞれの参加者が「自分の園の気

なる子]について話し合い、その結果、その子の「良さ」や「愛らしさ」が自然と作品（紙芝居）の中に現れたものとなった。また、「触れる絵」を制作する上での触覚による素材の使い分けや、工夫、作業の早さや的確さなどから、現役保育士・幼稚園教諭の高い造形能力が伺えた。音を入れながら紙芝居を発表する経験についても、初めて触れる珍しい楽器を楽しみ、工夫しながら音をつくる様子が見られた。



写真4 「たくやくんとぼーる」制作の様子。

たくやくんとボール

- ①ボールがだいすきなたくやくん。たくやくんはめのまえにあるボールを見つけました。コロコロコロ～。
- ②そのボールをどんどんどんどんおいかけていくと、たくやくんのだいすきなブランコがありました。ブランコをユラユラユラユラじょうずにこぎます。たくやくんはともうんどうしんけいがよくて、じぶんでたかくたかくこぐことができます。
- ③すると、かぜにふかれてまたどこからか、あかいボールがポンポンポン・・・「あれ、ぼくのあかいボール、どこにいくんだろう？」あかいボールがきになって、きになって、だいすきなブランコからおりて、そのあかいボールにどんどんどんどんついていきます。そしてボールをおいかけていくと・・・
- ④たどりついたのは、おともだちがたくさんのおへやのなかでした。みんなともだち、いっしょになかよくあそぼうね。

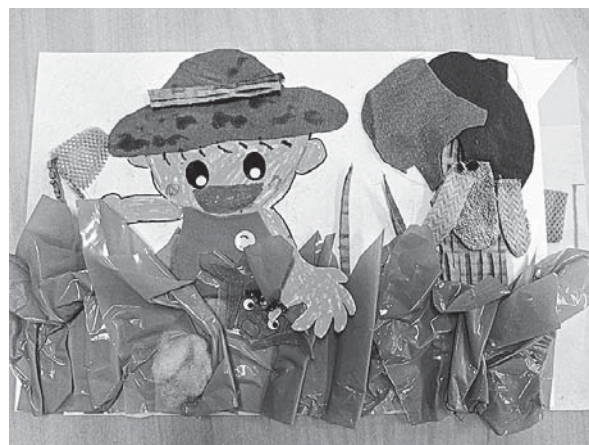


写真5 「こうちゃんのむしさがし」2ページ目

こうちゃんのむしさがし

- ①こうちゃんはむしがだいすき。きょうもくつもはかずにかってにでていってしまいました。
「らんらんらん・・・ふふふん・・・」
たのしみながらあるいていくよ。
「どこにいるかな～、むしはどこにいるかな～ここかな？」
- ②「あ。みつけた。あ、カブトムシ、せみもいる。たのしいな。」
- ③すると、おーん、チク！「いたーい！！」
こうちゃんは、はちにさされてしまいました。こうちゃんはむしがさすということがぜんぜんわかりません。だから、そこにいるむしをぜんぶさわってしまいます。
- ④「えーん、えーん。」なっていると、ともだちがよってきました。「だいじょうぶ？」「こうちゃん、だいじょうぶ？」「ちょっといたいけど、もうだいじょうぶ！」「あ、こうちゃん、ほっけになにかいるよ！」「え？なに？ほっけ？あ、そうだ！」
「かぶとむし、みつけていたんだ。ほっけにいていた。わすれてた。へへへへへ。」
- ⑤こうちゃんはこうして、まいにちむしさがしにでかけるのがだいすき。でもちょっとめをはなすと、しらないうちにでていってしまうので、てをつないででることをやくそくしました。

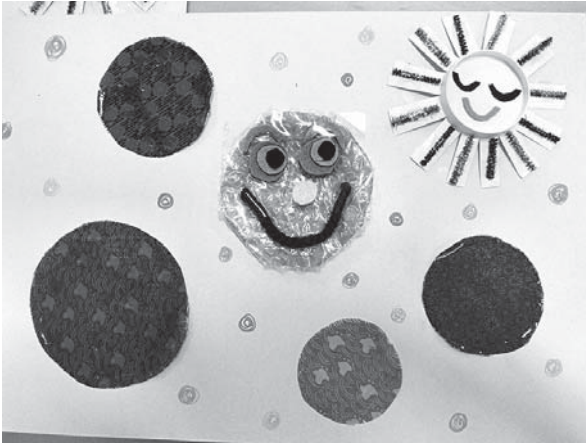


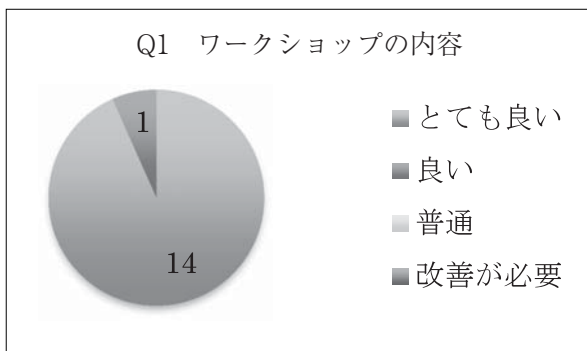
写真6 「しずくちゃん」4ページ目

しずくちゃん

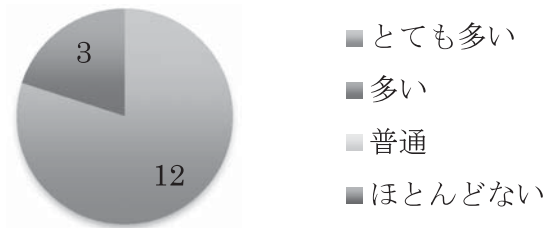
- ①しずくちゃんはゆっちゃんにだけみえるフシがないきもの。わたしのともだちはゆっちゃん。ゆっちゃんのでのひらってきもちいい・・・
- ②たんぽぽのわたげとふうわふわ。
- ③ブランコにのってゆうらゆら。
- ④わあー、シャボン玉きーらきら。もっとたかくたかく。
- ⑤わー、おちるー。びゅー。
- ⑥あーよかった！やっぱりここがいいよね。しずくちゃんおかえり。

5 研修を終えて－アンケートより－

研修後、参加者15名を対象として行ったアンケートでは次のような結果を得た。



Q2 ワークショップから学んだこと



Q3 ワークショップで新たに発見したこと (自由記述)

- ・アイマスクをして、目の大切さが分かった。
- ・楽譜がなくてもコミュニケーションが取れること。
- ・楽しい気持ちがあれば相手にも伝わること。
- ・視覚に頼って生活している部分がとても多いこと。子ども達にも触覚や聴覚、嗅覚、味覚などが使える遊びを提供していきたい。
- ・いろんなリズムを自由に創る中で、一体感を味わえ、とても楽しかった。
- ・楽譜やメロディーがなくても音楽というもののは成り立つことが分かった。
- ・視覚の重要性を改めて感じたこと。それを障害を抱えている人の立場に絶って感じたこと。相手を理解することの大切さを感じた。
- ・自分を自由に表現することは難しいが、自分が楽しむことが大切だと思った。
- ・知らない楽器を自由に使えて楽しかった。
- ・「触れる絵本」についてもっと知りたい。
- ・アイマスクをして、色々触ったり、味わったり、聴いたりすること。
- ・打楽器だけで演奏すること。
- ・紙芝居形式で、お話のストーリーを読みながら、音響効果を入れて発表する試み。
- ・打楽器だけでの演奏がとても楽しかった。先生の指示だけでみんなの心がひとつになれたことに感動した。
- ・自分の保育の固さ。(障害を持っている子どもを健常児に合わせようとしたこと。)

- ・音楽はこんなにも自由なものなのに、気がついたら20年、枠にはまった音楽活動をしてきた。もっと開放的に障害の有無に関わらず音楽の楽しさを感じられる保育をしていきたい。
- ・枠にとらわれない自由な保育。その中でのルールや決まり。個々の表現を認めていく。
- ・音楽リズムでは自由な演奏の中でも先生の合図ですばらしい音楽が成立していることに驚嘆した。
- ・人間が持っている5感をフルに活用できるような活動をさせたいと思った。
- ・造形と音楽のコラボが楽しい。
- ・造形と音楽のコラボはとても楽しい。また、それを一人で行うのではなく、グループで行うのがすばらしい。
- ・自由に叩いたり、好きに音を出すことで、一つのリズムになって楽しい発見であった。
- ・苦手な事も仲間と一緒にやることで楽しめた。

Q4 ワークショップで最も印象に残ったこと (自由記述)

- ・障害のある子どもに合わせさせるのではなく、周囲がその子に合わせる。
- ・自由に音楽を楽しむ。
- ・個性と受け止め、その子の表現を認める。
- ・リズム遊びをしている時(ドラムサークル)のみんなの集中力と生き活きた笑顔。講師の先生方の元気をくれる感じ、躍動感あふれる感じ。
- ・「触る絵本」というのは布絵本くらいしか知らなかったなので、とても貴重な体験をした。
- ・決まっていないリズム(即興音楽)を用いて、個が集まり合奏になっていく一体感。その中で合わせる、休む、止まる等を取り入れる事で1つになれていく様に感じた。
- ・グループで「触る絵本」を制作し、音をつけて発表したこと。

- ・ドラムサークル。好きな楽器で好きなリズムを刻む。声を出す。
- ・アイマスクをつけることで、話を聞く、触る(聴覚・触覚)がどれだけ重要な事が改めて感じた。障害を持つ人の気持ちになれた。
- ・見た事のない、聞いた事のない楽器に、触れたり(その)音を聴いたりすることができたこと。
- ・ドラムサークルでのセッション。楽譜がなくても、打楽器などだけでも素敵な合奏になること。
- ・色々な楽器があること。
- ・「やってみたい」と意欲をひきだせることを常に提案していけるよう、先生達のようにキラキラ輝いていたいと思った。
- ・ドラムサークル。とても楽しく気持ちよかった。子どもの気持ちに戻ったようで、表現することの難しさと楽しさがわかった。
- ・ドラムサークル。障害児とも楽しくコミュニケーションが取れる。その子の良さが引き出せる。
- ・ドラムサークル。障害児たちともコミュニケーションがとれる事。自分自身のストレス発散にもなる。
- ・アイマスクをつけて色々なものを触っていくなかでの感覚や飴を食べた時の味覚がいつもと違った。日頃は(情報を)目から取り入れているので、おもしろい体験だった。
- ・アイマスクをしてモノを触る。知っている、見たことがあるから触っても何だかわかる。手の感覚だけでモノを見るのは大変だと感じた。

Q5 ワークショップから普段の保育・教育業務に活かせること(自由記述)

- ・自由遊びの時や、時間に余裕がある時はどんなものでも良いので、叩いたり鳴らしたりしてリズム遊びをしてみたい。
- ・障害を持つ子に合わせてあげられるような先生になりたい。

- ・園にある楽器を使って自由にリズムを出すといったドラムサークルもどきのことをして子ども達の心を解放できたらと思う。そこから一人一人の子どもたちの新たな発見もあるかもしれない。
- ・触覚や聴覚を使うクイズのようなものを作ってみたいと思う。
- ・先生がまず楽しむ！ということのを忘れずに保育していきたい。
- ・音楽では楽しむ活動、子ども達の自由な発想を基に、1つになれる活動ができたらと感じた。ドラムサークル的な活動もしてみたい。造形では色々な素材を用いて切り貼りをし、(子どもが)触覚に気がつくような活動を取り入れたい。
- ・音楽遊びの方法。
- ・自由に表現すること。
- ・今までとは違う絵本の親しみ方。
- ・アイマスクで色々触ったり、味わったりすること。
- ・打楽器だけで音楽を奏でること。
- ・色々な素材を使って造形あそびをすること。
- ・絵本を作ったり、自由に音楽表現したりする楽しみ方を保育に取り入れたい。既成の楽器にとらわれず手作り楽器も楽しい。
- ・音あそびを工夫して、音楽を子ども達と一緒に楽しみたい。描く(クレパス・絵の具・マジック・コンテなど)だけでなく色々な素材のものを切ったり貼ったりして触覚を楽しませながら造形活動に取り組みたい。
- ・手作り絵本で子ども達にお話したい。
- ・型をつくらない音楽
- ・自由な(子どもの)発想を大切にす芸術的な活動。(描きたい色で描けば良い。縦も横も自由)
- ・感触あそび、打楽器だけのあそびなどは(自由に)いつでも保育に取り入れることができる。また、楽器がなくても身体全部(声も含めて)が表現に使えるのでいつでもどこでも始められそうだと感じた。
- ・導入。子どもが興味を示すことを保育士が一番楽しんで行うことで、子ども達も自然に中に入って来る。もっと深く広く保育が

できると思った。

- ・ある程度の制約の中で自由に表現をさせる。
- ・色々な感覚あそびを楽しませようと思った。昨今、視覚支援については配慮しているが、逆にアイマスクを使った感覚刺激もさせてみたい。
- ・ドラムサークルは日頃の保育で取り入れたいと思った。
- ・みんなの協力でひとつの紙芝居が完成し、楽しかった。音をつけるとリアルになりおもしろかった。
- ・形にとらわれず、その人の完成で音楽を楽しめることが、低年齢の今だからこそ大切である。感情を言葉や表情だけではなく、表現できることも見ていきたい。

Q6 今日の体験の感想(自由記述)

- ・はじめは「どうしよう」「いやだ」と思っていた。先生の話聞いて「日本は強い」と思った。どこかで正解や「ちゃんとしないと」ばかりを求めて音楽の本当の楽しさを子どもに伝えられていないと思った。また、色々なものに触ることも、幼い子どもにたくさん経験させてあげたいと改めて感じた。
- ・先生方と1日過ごし、元気やパワー、やる気もらったように思う。私自身年長児の子どもを持つ母でもある。共に自分の身体にも気をつけながら楽しみたい。
- ・最初は少し不安があったけれど、「自由に楽しむ」ということの楽しさが分かった気がする。恥ずかしさが勝って「自由に」というのは難しい部分もあるが、子ども心を忘れず、まず保育者が楽しむということ大切にしたい。
- ・個の活動から、グループで作り上げることの楽しさを感じた。子どもと関わる大人がまず笑顔で楽しむことが一番だと改めて感じた。
- ・知らない事、分からない事、難しい事がまだまだたくさんあると感じた。今日体験し

たことは初めての事ばかりで、楽しかった。もっと色々な事に目を向けようと思った。

- ・自由に楽しく表現する心地よさを感じた。いかに学校や家庭で型にはまった教育を受け、その影響で（自分が行う）保育もそうになってしまうことの恐ろしさを感じた。「自由に」は難しい部分もあるが、個性や自分らしさを表現する方法を少しずつでも知り、実践していきたい。
- ・「楽しかった」の一言。時間があっという間に過ぎた。ドラムサークルに興味をわいた。
- ・心を合わせて音を楽しみ、一つの目的に向かって話し合い、協力しながら絵本を作れて楽しかった。研修を通して学んだことを仲間と共感しあうことができたので、もし一緒に保育ができる日があれば楽しい保育ができると思う。まず自分でできることからやってみよう。
- ・先生方2人とも素敵でキラキラしていると感じた。子育てされながらも（私の子どもは既に社会人）こんな風に仕事ができるのだと自分を振り返ることができた。
- ・とても楽しい1日だった。先生達の子育て真最中で、家庭と仕事の両立をがんばられていることにも共感が持てた。自分がいきいきできる学習をどんどん見つけていきたい。
- ・先生方の雰囲気がとても良くて、興味を持って取り組めた。アート（音楽・武術）は人々の心を開放的にし、繋がらせてくれる気がした。色々な楽器を保育所の子ども達にも触れさせたい。（子どもが）喜ぶ顔がずっと目に浮かんでいた。島にある保育所で、少人数のため、街の子ども達に比べると恥ずかしがり屋かもしれない。ドラムサークルなど、自由な表現の力を大きく成長させる保育をしたい。
- ・見たことのない楽器に触れることができ楽しかった。
- ・絵本作りを体験し、難しいと思ったけれど、グループのみんなと協力することで1つの

ものができあがり良い体験になった。

- ・絵本の中で音楽を加えるのはおもしろいと感じた。
- ・自分がいかに普段視覚にたよっているかがわかった。
- ・表現あそび・活動の楽しさを体感できた。「一人ではなく、皆で」共有できて、楽しさ倍増だった。
- ・初めての体験だったが、楽しい1日となった。今日習った事を保育所に戻り、職員に話して少しずつ実践してみたい。まずは指導者が楽しむ事が一番。
- ・楽しかった。心の解放、先生の目の輝きに魅力を感じた。絵本作りはたくさんの人とイメージを共有し、作り上げていけたことに達成感を感じた。

6 ワークショップの成果・反省

6-1 造形活動の視点からの考察

造形表現活動は、「身体表現活動」「音楽表現活動」と並んで、乳幼児期から保育園や幼稚園で行われる3つの主なる課業の一つを成し、一般的に子ども達が幼い頃から親しみ、好む活動であるとされている。

その根拠として、学研教育総合研究所の「小学生白書Web版2010年9月調査」を挙げる。図画工作が一番好きな科目と答える児童数は算数(20.9%)、体育(19.4%)に次いで15.6%と3番目に多く、このことから、基本的に子どもが好む科目であることが伺える。しかし学年別に見ると、図画工作が好きであると回答する児童数は、1学年では21.5%であるのに対して、6学年では8.5%までに減少する。この「好き」から「嫌い」への変化は他教科と比較しても著しく、ここに「年齢が上がるにつれて嫌いになる傾向がある」というこの科目の第二の特徴が見られる。その理由としては、自己中心的に物事を捉える幼少期には自分の表現(行為)に没頭し、その活動を楽しめた子どもが、発達とともに客観的な観点を獲得し、他者と自己を比較するようになり、その結果「上手くできない」と感じるためであるということが良く知られている。一方で、「造形活動」や「図画

工作科」とは、幼稚園教育要領・保育園保育指針（表現）では「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする」活動と記され、小学校学習指導要領解説（図画工作科）には「表現及び鑑賞の活動を通して、感性を働かせながら、つくりだす喜びを味わうようにするとともに、造形的な創造活動の基礎的な能力を培い、豊かな情操を養う」ことが目標とされているように、技術的に「上手い」ことは求められていない。それにも関わらず、現場の指導者でさえ「出来映え」を重視する傾向にあるのは、「豊かな感性や表現する力」や「豊かな情操」を獲得した具体的な子どもの姿が不明瞭であり、向かうべき方向が見えないことがその原因として考えられる。

この「表現する能力」が育っていない現状を、昨今の大学生に見ることが出来る。図画工作の授業で学生達が最も苦手とするのは「自由に描く」ことである。その理由として、「何を描いたら良いのか判らない」「何も思いつかない」という声が挙がる。次に、テーマを与えても、「携帯で画像検索をしなければ、何も描くことができない」「既存のキャラクター以外は思いつかない」姿がある。この「表現」を前にして思考も行動も停止してしまう姿は、本能的、あるいは衝動的に活動をする幼い子どもには珍しいとされていたが、最近では「表現」を苦手とする子どもについての報告も多く、その指導に悩む指導者も少なくない。

「造形」について、その「表現力」育成の根底は「考えた事」と「描く・創る行為」を結びつける経験にあるといえる。一方で、近年の子どもの遊び環境は、屋外での泥遊びや小屋作り、草笛作りなどを行う機会が著しく減少し、身の回りには洗練された玩具があふれ、ダンボールや古布などを「みたく」「工夫し」「改造」しなくても十分に遊びは成立する。さらには部屋や服が汚れるのを嫌う保護者が絵の具やクレヨンなどを敬遠する傾向にある。スマホのゲームでは手をかざせば新しい図柄が次々と出現する。現代の子ども達は日常生活の中で、自らの「手」を使い、何かを創り出す経験に不足している。

論者（小笠原）は「すべての感覚」に気付き働かせること、さらには「切る・貼る」などのある程度の困難さを伴った手仕事の要素の有用性に着

目し、そして最終的に制作を通して「他者理解」の心を培うことを目標に「触れる絵本」制作活動を実践してきた。現在までに保育園年長児、小学校1、2年生、大学生、および指導者である保育士・幼稚園教諭を対象として行ってきたが、この活動は子どもが幼少期から「障害」や人間存在の「多様性」を理解し、尊重する心を育てることをねらいとしており、主に障害のない子どもが対象となっている。教育・保育機関で行われる造形活動に於いて、発達障害を持つ子どもの中には、じっと座っていることが苦手であるなどの理由によって「静的な活動」である「造形活動」を苦手とする子どももいる一方、黙々と自分の世界観を圧倒的な表現力で表出する子どももいる。そのような視点からも、この「触れる絵本」制作は障害の有無を超えて共に行う活動としては、多くの課題を残すが、「触覚の発見」という活動からの可能性を模索していくことが今後の課題である。

6-2 音楽療法の視点からの考察

日本音楽療法学会による定義には「音楽療法とは、音楽の持つ生理的、心理的、社会的要素を用いて心身の障害の回復、機能の維持改善、生活の質の向上、行動の変容などに向けて、音楽を意図的、計画的に使用するものとする」とある。音楽療法は欧米を中心として発展した療法の一つであり、近年我が国でも急速に発展した。論者（狩谷）は音楽療法士として医療福祉施設、教育機関にて障害児・者を対象とした音楽療法実践を行っている。

発達障害児を対象とした音楽療法は世界各国で実践されており、その成果や有用性も検証されている。音楽療法の現場で取り入れられる手法の一つである創造的音楽療法は即興音楽を対象者とのコミュニケーションツールとして用いる方法である。即興音楽を用いた創造的音楽療法の代表的な開発者のポール・ノードフとクライブ・ロビンズらによる音楽療法の実践は、セラピストと障害児・者との間に発生する即興音楽を通して人との関係性を確立してゆくものである。この方法は、対象となる障害児の独特の個性を自由に表現することを促し、セラピストと共に音楽づくりの共同作業を行うことに治療の焦点があてられる。発達障害児の体験している世界へ療法士が共に音楽で

寄り添うことで子どもの内的世界を理解し、共感し、より良い関係性とコミュニケーション能力を構築するのである。

このワークショップで行った打楽器による即興演奏体験は、音楽療法の手法で一般的なピアノやギターなどの伴奏楽器こそ使用しなかったが、音楽をコミュニケーションと集団における相互体験、そして自由な自己表現の場とするところは創造的音楽療法の理論と共通するところがある。ドラムサークルの要素を音楽療法臨床に取り入れることが自然であるのも、この自由な即興的表現を促しコミュニケーションに繋げる、という特徴が音楽療法臨床に応用可能だと考えるからである。障害児のしている、体験している世界はその本人にしかわからない。ゆえに他者を遠ざけてしまいがちであり、無意識に孤立し「扱いにくい子」として存在しがちである。特に発達障害児の特徴とされる言語の遅れが原因となり「何を考えているのかわからない」感覚を周囲の保育士や子どもに与える。その「わかりにくい世界」へ音楽を通して近づくこと、そしてそれを周囲の子ども達と分かち合うができないだろうか。言語で伝えきれないことを音楽という媒体を介してつながることができれば、障害児と健常児が共に違いを認め、学びあい、共に刺激されながら成長することが可能にあるのではないかと考える。

障害を持つ人達の独創的な芸術作品はアウトサイダー・アートと呼ばれ世界中で評価され始めている。同じく音楽もアウトサイダー・ミュージックとして、斬新で芸術性の高い即興音楽表現活動が繰り返されている。神戸を中心に活動を広げる「音あそびの会」がそのパイオニア的活動を世界で展開している。そこでの音楽は、従来の教育的指導は全く導入されず、障害児・者によってただ奏でられる一般的には「雑音と無音」と捉えられる時間を編集することなくそのままの形で発表している。そこからインスピレーションを得る作曲家や演奏家は後を絶たない。歌や楽曲を集団の中できちんと歌う、演奏する、という従来の発表を目的とした音楽活動の中で、「じっとできない」「奇声を上げる」「耳をふさぐ」等の行動が出てしまう発達障害児の指導は困難であるといえる。しかし、活動に少しの即興性を取り入れることで、「変わった子」の障害は個性として輝かせること

が出来、その個性を受け入れ新たな音楽遊びに展開してゆくことが出来る。周りの子ども達もその個性を認め合うことを学ばせよう。

「即興的な音楽活動」と聞くと、難しいイメージをもつ保育者も少ない。実際、今回のワークショップでの活動も緊張感の中に始まった。想像力豊かな子どもたちと日常的に関わっているプロの保育士にとっても「音楽で自由に表現すること」は容易ではないことが明らかだった。しかし、ウォーミングアップ後、演奏が始まると驚きの表情が見られた。打楽器のみで、しかも楽譜もなく、素晴らしい音楽アンサンブルが可能であることを体験された保育士の参加者の反応は想像以上であった。この「ワクワク」「楽しい」体験を子どもたちにもさせてやりたい、との意見も多く聞かれた。このワークショップでの活動と参加された保育士の感想をヒントに、発達障害児と健常児が共に認め合い、楽しむことができる即興的な音楽の可能性を研究する必要がある。

7 アートの力 ～まとめにかえて～

経済成長の追求を国家が最優先し、人文学と芸術が「無用のもの」と切り捨てられる状況の中で、現代は社会風潮全体が「自らの感覚で表現すること」や「他者の表現を認め、共に愛でること」への自信を喪失している時代であるように思われる。しかし、一方で、「美的表現」というものが人類の黎明期から現在に至るまで、人間の本能、衝動ともいえるべき根源的な活動のひとつであったこと、あるいはあることは揺るがしのない事実である。この人間が根源的に、その資質の中に授かり持つ「衝動活動」としてのアートに注目したい。次に、幼稚園の創設者で幼児教育学の先駆者として知られるFr. フレーベル (1782-1852) は「われらをして子どもらに生かしめよ！」と述べ、子どもを「真性にして根源的な」存在と見ていることに着目する。この二つの「根源的な力」から、今日の幼児期教育の重要課題に答え得る活動が導き出される。具体的には、表現（造形・音楽）活動と幼児教育を結合して、「表現活動」を幼児・児童期人間の「源初的活動」として人間学的にとらえ、その表現活動を「共に」創る過程を重視して、「他者理解」「他者とのコミュニケーション」能力

の育成というものである。

「表現」という活動が「自己を表す」「自己を伝える」「活動である」という前提に立ち、その活動を「他者（の表出）を認める」「他者を受け止める」という、相互に作用し合うものに幅を広げることによって、子どもおよびその指導者が、「表現活動」の持つ力を実感的に理解できると考える。今後の課題としては、楽しみながら「共に」創る課程について、理論と実践という両サイドからのアプローチにより、そのプログラムを確立していくことが挙げられる。

参考文献

- 1) 広瀬浩二郎「さわる文化への招待－触覚でみる手学問のすすめ－」、世界思想社、2009
- 2) マリア・モンテッソーリ、武田正実（訳）「創造する子供」、エンデルレ書店、2000
- 3) 堀智晴・橋本好市（編著）「障害児保育の理論と実践－インクルーシブ保育の実現に向けて－」、ミネルヴァ書房、2010
- 4) ジャン・ジャック・ルソー、今野一雄（訳）「エミール」、岩波書店、1962
- 5) 小笠原文、「原初的なもの」が示唆する造形表現教育の可能性－フランスの原始美術からの考察－、大学美術教育学会「美術教育学研究」第46号、2014
- 6) 厚生労働省HP軽度発達障害児に対する気づきと支援のマニュアル、
http://www.mhlw.go.jp/bunya/kodomo/boshi-hoken07/h7_02a.html
- 7) 田中洋二郎「発達障がいと家族支援」、学習研究社、2009
- 8) ケネスE. ブルーシア、「即興音楽療法の諸理論 [上]」、人間と歴史社、1999
- 9) 高橋三郎他（訳）「DSM-IV精神疾患の分類と診断の手引」、医学書院、2000
- 10) 狩谷美穂、「コミュニティ音楽療法の一環としてのドラムサークル実践の可能性－音楽で地域社会をつなぐために－」、広島文化学園大学学芸学部紀要創刊号、2011